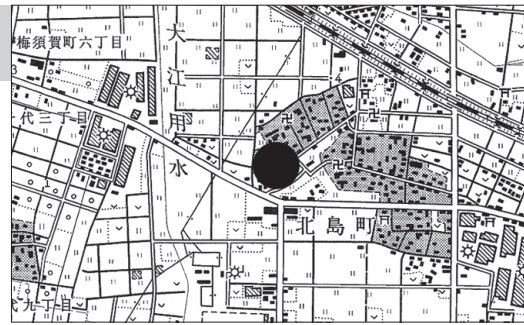


かみなか にしやしき
上中・西屋敷遺跡

所在地 稲沢市北島町地内
調査理由 県道須成七宝稲沢線建設
調査期間 平成12年4月～12月
調査積 4,600 m²
担当者 服部信博・宮腰健司・織部匡久



調査地点 (1/2.5 万「清洲」)

調査の経過 上中・西屋敷遺跡は稲沢市の市街中心部から南寄りの北島町に所在する古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。県遺跡地図には記載されているが、これまで発掘調査がなされたことはなく、表面採取された遺物からその年代と範囲が推定されていた。本遺跡調査は県道須成七宝稲沢線建設の事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積 4,600 m²を 10 の調査区に分け、平成12年4月から12月にかけてそれぞれ実施した。

立地と環境 上中・西屋敷遺跡の所在する北島町は東西に走る東海道新幹線以南から並行して走る主要地方道名古屋祖父江線をはさむ形で広がっている。集落の中心は名古屋祖父江線の北側に沿う状態で広がっている。名古屋祖父江線は近世の村絵図に記載されている八神街道におおよそ合致しており、集落の広がりもこれに沿う形であると思われる。今回の調査区は北島町の西寄り、上中・西屋敷地区に位置し、集落域である微高地の西端を南北に縦断する形で設定されている。遺跡は標高 1.5 m から 2 m 前後で自然堤防上に立地している。北部と南部には後背湿地、河道などが存在する。また集落の北から西にかけては旧来、沼沢地であったと考えられ、住居が営まれていた高まりからはずれると湧水が発生しやすい状態である。周辺の主な遺跡としては名古屋祖父江線をはさんだ南側に弥生時代から中世に位置づけられる流遺跡が、また東に 1 km ほどのところには古墳時代の中花の木遺跡がある。

調査の概要 基本的な地形はD区とE区の北半を最高位とし、南北両方向に向かうに従い低くなる。北側ではC・B区部分がやや低く、B区北端で急激に落ち込んでいる。南側では、E区の南半とF区北半に落ち込みがあり、F区南半からG・b区にかけてやや低い部分があり、H区・I区南半で急激に落ち込んでいく地形が形成されている。調査は、北側では表土を除去した時点で検出できた黄褐色砂上面で江戸期以降の遺構を確認し、さらにそれらを除去した後、明青灰色砂上面において中世の遺構を確認した。中央のD区とE区の北半では、黄褐色砂と明青灰色砂の間に、20～30 cm 程の厚さをもつ褐灰色砂がみられ、古墳時代から中世にかけての堆積層であると考えられた。南側では、南にいくほど黄褐色砂層は薄くなっており、古墳時代から中世の遺構はほとんど見られなくなる。

A 区 調査区の大部分に家屋移転時の攪乱が認められたが、南端において現道に沿った溝を検出した。時期は江戸期以降か。

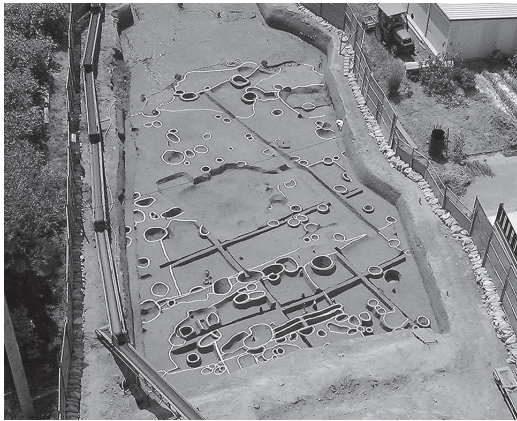
B 区 中央部より一段下がり、北端からさらに落ち込む地形になる。中世の遺構としては、方形土坑を 13 基検出した。土坑は長径 3～4 m、短径 1.5～2 m を測る大型のものと、長径 0.7～1 m、短径 0.7～2 m の小型のものがあ、埋土中に攪乱状の堆積が見られる。ただ所



E区 SB 04 出土台付甕（北から）



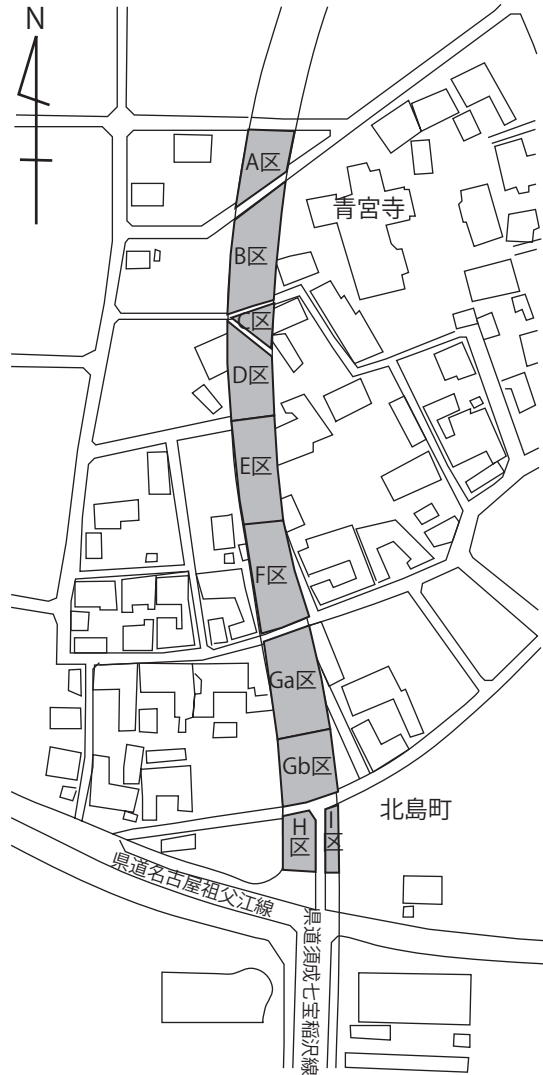
D区 北半竪穴住居群（南から）



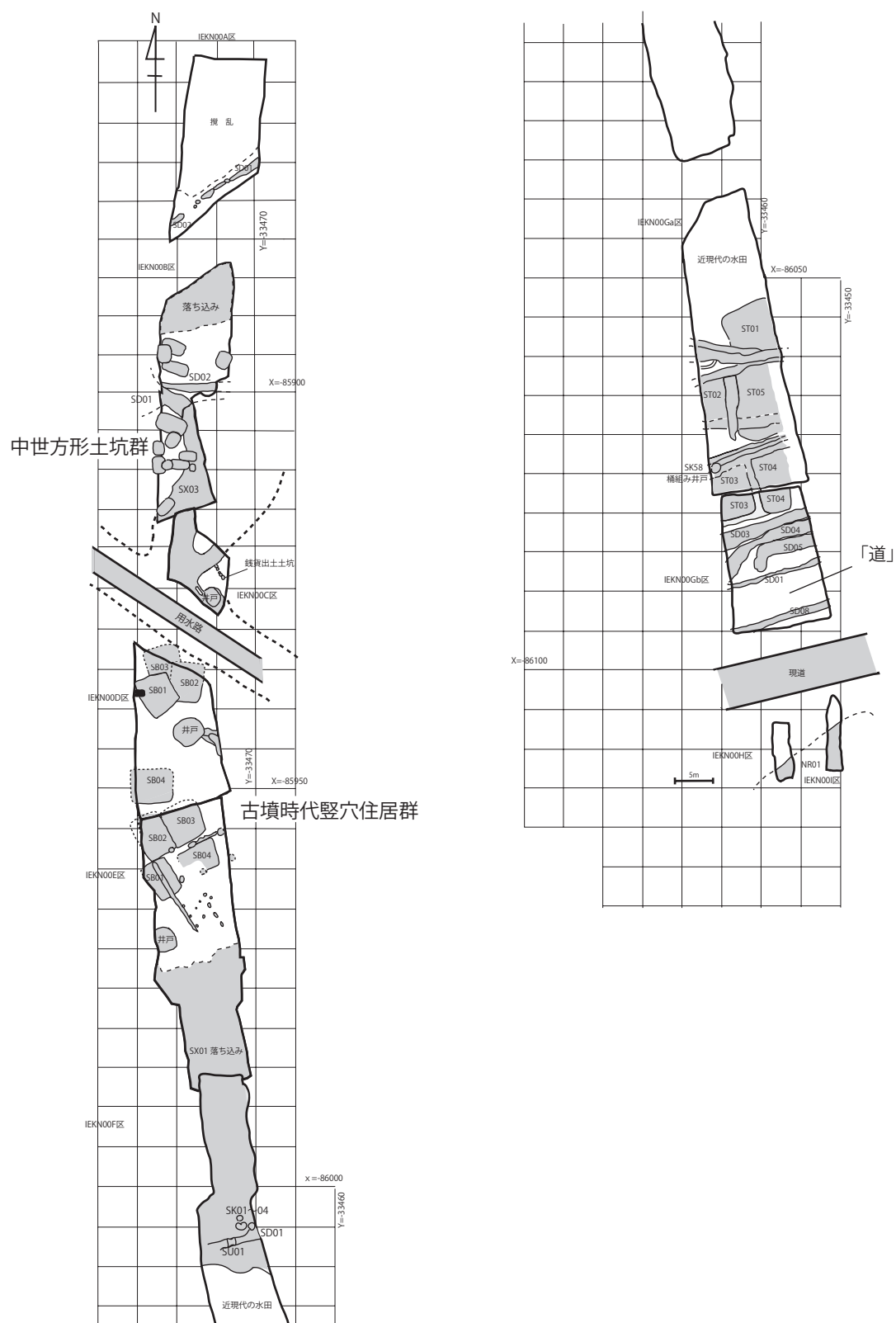
E区 北半竪穴住居群（北から）



G b区 作業風景（東から）



第1図 調査区配置図 (1:2,500)



第2図 主要遺構図 (1:800)

属時期を中世としたが、確実な遺物の出土はなく、S D 01 より古いものになる。江戸期の遺構としてはS X 03があり、深さ1～1.5 mを測り、C区まで続く大きな落ち込みとなる。埋土には流水の痕跡などはみられず、下層では自然の平行堆積をなし、上層になると再掘削や18世紀以降の遺物の廃棄が顕著に行われている。またS X 03の北西角に接続するように走るS D 01の下層の砂層からは、16世紀後半の天目茶碗がほぼ完形で出土しており、その遺物が示す時期前後がS X 03を含めた遺構群の上限となると考えられた。さらにS D 02は時期がやや新しくなるが、S X 03と関連するものと思われる。

C 区 調査区全体がS X 03となるが、東側に北東から南西に延びる高まりが二ヶ所あり、南側のものは南西端が階段状になり、底面に落ち込んでいる。またその高まりの南側には、木杵や曲物などは確認できなかったが、13世紀代の井戸と思われる大型の土坑があり、さらに高まりに直交するように小土坑列が検出され、「大観通宝」を含む銭貨が約7枚出土している。

D・E区 調査区内でもっとも高く安定した基盤を呈しており、古墳時代の竪穴住居が8棟検出された。さらに竪穴住居は、古墳時代初頭になるE区S B 02・S B 04と古墳時代後期に属するS B 01・S B 03に分けることができ、D区の住居群も後者の時期と考えられる。また同地区には、江戸時代中葉～後葉の溝・掘立柱建物・柵列・井戸が検出されており、この時期も居住域であったことが窺える。

F 区 E区南半から続く落ち込みS X 01が北半を占め、南半は近現代の水田になっている。S X 01の埋没時期はB区S X 03と同様江戸時代後葉であるが、成立時期については不明である。また、いくつかの高まりが検出され、その部分に江戸時代後葉の土坑が掘削されている。

G 区 G a区北半は近現代の水田が続き、南半からG b区にかけて江戸期の水田、およびそれらに付随すると思われる溝群・桶組みの井戸が検出された。またG b区の南側のやや高い部分に、水田と平行して5～5.5 mの間隔をもって走る2条の溝が見つかった。この部分には水田が広がらず、他の遺構も見られないことから「道」になると思われる、位置や方向から見て古い「八神街道」である可能性がある。

H・I区 基盤は南側に急激に落ち込んでおり、安定した状況で粘土が堆積している。下層の明オリープ灰色粘土からは古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が出土する。またその上層には、鉄分が固着する多孔質の褐色砂が約20 cmの厚さで堆積している。（宮腰健司・織部匡久）



C区 銭貨出土状態（南西から）



G a区 SK 58 桶組み井戸（東から）